青森県総合運動公園…運動から文化・歴史を活用した大規模公園へ

Aomori Prefecture Sports Park—To the Large-scale Park which Utilized Culture and History from the sports

清藤 栄*
Sakae SEITO

1. 計画敷地の概要

(1) 青森県の概要

青森県は、総面積 9,640km²で本州の最北端に位置し、北は津軽海峡を隔てて北海道に対し、南は秋田・岩手の両県に接している。計画地のある青森市は、津軽半島と夏泊半島に囲まれた青森平野の中央に位置し、市の南側及び東側には北八甲田連峰、西側には津軽山地があり、北側には陸奥湾が開けている。

青森県の気象は奥羽山脈を挟んで、冬に寒気が厳しく降雪量が少ない太平洋型気象区と、冬に降雪量が多いが比較的暖かく夏が比較的冷涼である日本海型気象区とに分かれる。

青森県の人口は平成 10 年 12 月 1 日現在、約 1,513 千人でピークである昭和 58 年の約 1,530 千人からわずかに減少傾向にある。

図-1 青森県地図

(2) 計画地の概要

青森県総合運動公園の計画地は、青森市の中心部から南西へ約 4 km、八甲田山系から続く丘陵の先端に位置し、沖館川に面した標高約 20m の河岸段丘上に立地する。

青森県総合運動公園の面積は約 74.8ha、うち遺跡ゾーンの計画地は約 39ha となっている。既開設区域の運動公園ゾーンは、昭和 41 年度の全国高等学校総合体育大会を契機に、昭和 39 年度から整備に着手し、青森県総合運動場（スポーツセンター）として昭和 42 年度に、面積 12ha で開設された。

その後、昭和 52 年の第 32 回国民体育大会（「あすなろ国体」）並びに第 13 回全国身体障害者スポーツ大会の開催が決定し、昭和 47 年度に都市公園（43.0ha）としての整備に着手、国体開催の昭和 52 年度までに主陸上競技場の改築をはじめ、体育館、屋内プール、蹴球場等を新設整備、県下の運動施設の最上位に位置する県営の広域公園として今日に至っている。

しかし、昭和 42 年度の開設以来 30 年が経過し、運動施設の老朽化が目立つようになり、運動施設の更新と新たなスポーツレクリエーションニーズに対応するために、平成 3 年度には計画面積を拡張し、同年、総合運動公園としての再整備事業に着手した。

平成 4 年度から新しい野球場の建設工事のため区域内にある三内丸山遺跡の埋蔵文化財調査を実施した結果、これまでの縄文の常識を覆す遺構・遺物が大量に発見された。

この調査によって、この遺跡が縄文時代前期中頃から中期（約 5,500 年前から 4,000 年前）までの約 1,500 年間にわたって継続して営まれた日本を代表する縄文集落の跡であること、当時の生活や自然環境とその変遷を具体的に解明できる全国的にも貴重な遺跡であること等が明らかになった。

このため、県は、野球場の建設工事を直ちに中止し、遺跡を保存・活用すること、遺跡の整備は都市公園事業で進めること、遺跡の調査を継続的に行うこと等を決定した。

*青森県土木部都市計画課公園整備推進室

なお、平成7年度には、県総合運動公園の適地の検討を行い、十分な面積を確保できる青森市東部の宮田地区に移転し、新青森県総合運動公園を整備することを決定し、また、青森県総合運動公園移転後の跡地に、遺跡ゾーンに隣接して、美術・音楽・演劇等総合的な芸術文化の創作・鑑賞・交流の推進拠点として、美術館を核とした(仮称)総合芸術パークを建設することが決定した。また、その整備に当たっては、隣地に存在する遺跡ゾーンとの一体性を図り、かつ、青森という土地の持つ歴史、風土、文化を十二分に咀嚼して整備する方針である。

2. 基本理念と整備の方針

(1) 基本理念

三内丸山で生活を営んでいた縄文人の「むら」の跡を貴重な歴史遺産として保存し、縄文の「むら」のたたずまいを体感・体験できる場として整備することによって広く活用を図り、縄文文化の解明とその世界的規模での見直しを行うと共に、縄文が現代へ投げかけている諸問題を、様々な活動を通して発信する文化交流の拠点とする。

(2) 整備の方針

《全体計画》

- ①青森県総合運動公園の運動ゾーンについては、新たな敷地に移転が決定し、運動ゾーン跡地は、(仮称)総合芸術パークとして整備される。
- ②遺跡ゾーンの一部が史跡指定され、今後も、発掘・調査が長期的に継続される。
- ③理念と整備の基本方針でも述べたように、原則として、発掘調査と研究の成果に基づいて遺跡の整備を進めるものとし、調査の進展に応じて遺跡は常に変化するという考え方を整備プログラムに組み込み、柔軟な姿勢で臨む。

《集落復元》

- ①縄文のムラのたたずまいを表すことを主目的に、建物遺構は復元整備を基本としてムラの風景づくりを行う方針とする。
- ②また、盛土遺構、大人の墓、子供の墓等の建物遺構以外の遺構については、同じく復元整備を行うが、縄文のたたずまいとの調和を考慮しながら、一部露出展示を行い、生の遺構の迫力を示すことを検討する。

《植生復元》

- ①縄文時代の三内丸山人の生活とそれを取り巻く環境を、忠実に復元するための調査を行う。
- ②三内丸山遺跡にみられる特徴的な植生環境を、現在の環境条件を考慮して復元する。
- ③「縄文のたたずまい」の中に、「いこい」や「やすらぎ」を醸し出すように植栽整備を行う。

《公開・活用》

- ①史跡三内丸山遺跡の研究成果を踏まえ、縄文の「たたず

まい」を公開する。

- ②利用者の理解を深めるため、縄文の「たたずまい」を整備すると共に、出土遺構・遺物等の展示を行い、更に解説書をはじめとする多様な情報手段の充実を図る。
- ③「ねぶた祭り」等の伝統的な祭りや並ぶような、史跡を中心とした新しい祭り等を企画し、文化観光立県としての推進を図る。

(3) 当面の重点整備内容

遺跡ゾーンの整備にあたり、利用者数は年々増加しており、平成8年度では約51万人、平成9年度は12月までに約55万人の人々が訪れている。そのため、今後、仮施設の恒久施設への転換を含めて、早急に利用者への各種サービスの充実や管理運営体制の整備を図る必要がある。

そのため、当面、主入口施設区の公園センターや駐車場等、北地区と南の谷の地形復元、集落・植生復元を重点的に進めていくことにしている。

図-2 青森県総合運動公園遺跡ゾーン基本計画全体平面図

写真-1 大型掘立柱建物
(冬至の日の入りと建物の長軸方向が一致)